氏　　名（国籍）	鐘　俊　梅（中国）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 の 番 号	甲 28
学位授与年月日	2015 年 3 月 13 日
学位授与の要件	学位規定第 20 条　2 項該当 文学研究科（日本文学専攻）
論　文　題　目	初期横光利一文学研究　―闘いの軌跡―
論文審査委員	（主査）梅光学院大学　教　授　中 野 新 治 （副査）梅光学院大学　教　授　浅 野 洋 （副査）活 水 学 院　院　長　奥 野 政 元

【論　文　要　旨】

本論文は〈人間存在の不安〉という初期の横光文学の中心テーマの成立をめぐり、彼の初期の作品と評論を中心に、特に第一創作集『御身』（金星堂、大正十三年〈一九二四〉五月）に収録された出発期の代表作と新感覚派時期の代表作に注目して、初期の横光の文学活動の軌跡を明らかにすることを目指したものである。具体的には、序章の「本論文の研究方法と研究目的」、第一部の「文壇デビューまでの軌跡」、第二部の「実験的な出発期」、第三部の「華々しい新感覚派時代」、また、終章の「初期の横光文学の特質」の五つの部分から構成されている。

初期の横光文学を貫く大きなテーマは〈人間存在の不安〉（あるいは〈生の不安〉）そのものであり、その源は、本論文の第一部の中で考察した、横光の少年時代と青年時代の各種の孤独と不安に満ちた体験から導き出される。子供のごろから転々とした生活を経験し、「旅愁」を味わいながら成長した横光は、常にデラシネの孤独と不安を感じていた。早稲田時代の共同生活でのトラブルによる深刻な「人間不信」感の刺激で、横光は遂に筆を取り、文学創作に投身した。心底の苦悩を「恋を、死を、そして淋寂を」作品の中で記している。好きな女性との思わぬ死別、また最初の妻となったキミとの交際による種々の煩悩なども、若き横光の人生に対する思索を深めたと同時に、初期の横光文学に〈存在の不安〉という暗い陰を落とした。

本論文では第二部と第三部の中で、初期の横光文学を二つの段階に分けて考察した。一つ目の段階を、初めての習作「姉弟」が執筆された大正六年〈一九一七〉から、デビュー作「蝿」

と「日輪」が掲載された大正十二年〈一九一三〉までとする。この段階は横光の文学活動の中で、実験的な出発期と呼ぶことができよう。この段階について、第二部の中では、主に第一創作集『御身』（金星堂、大正十三年〈一九二四〉）に収録された作品を中心に考察を展開している。また、「頭ならびに腹」が掲載された大正十三年〈一九一四〉から、「上海」の礎稿が連載し終わった昭和六年〈一九三一〉までを初期の第二の段階とした。この第二の段階は通常新感覚派の時代とも呼ばれている。この段階について、第三部の中では、横光と新感覚派運動とのつながりと、先に触れた二つの新感覚派時期の代表作を中心に論述を展開させた。この二つの段階の作品群は、横光の作家的な成長により、〈生の不安〉というテーマをめぐり、それぞれ違う角度から表現しようとしていることを確認した。第一の段階の作品群は、主に作家自身のもっている〈内在的不安〉を語る形で表現しており、これに対して、第二の段階の作品群は、激変する各社会の関係（つまり、各種の社会的な「場」）に置かれる人間に与えられた各種の〈外在的不安〉について表現しようとしたと意味づけた。

第一創作集『御身』の序文となった同名の散文詩「御身」は、太古時代における「余」と「リイ」の悲劇の愛情物語について語ったものである。「リイ」の殉死によって永遠に結ばれたはずの「余」と「リイ」との愛は、現代社会での「発掘」という思いがけない事態に遭遇し、忽ち失われた。ここで提示された、偶然の出来事によって、主人公たちが本来の生活の軌道から外され、悲劇の結末を迎えるという、偶然性に満ちた〈破壊〉の構図は、第一創作集の作品群の中で、形を変えて繰り返されているものである。「日輪」に登場する不弥の王女卑弥呼と婚約者卑狗の大兄も本来幸せな恋人同士だったが、二人が密会していた森での、迷子になった奴国の王子長羅との偶然の遭遇によって、平和な生活は一挙に破壊される。この遭遇によって、卑弥呼は婚約者をはじめ、父母、更に国を一夜で失い、波乱万丈な人生を送り始めざるを得なかった。「蝿」の中で描かれた、蒸したての饅頭を食べた猫背の馭者の居眠りによって、馬車の転落事件が起こされ、馭者も、ぞれぞれの夢を持っていた乗客たちもみな死の世界へ赴くという物語も、やはり偶然性に満ちたものと言わざるを得ない。また、「赤い着物」の中で描かれた少年灸の急死、「碑文」の中で描かれた、大雨による都市ガルタンの全滅などの物語世界も、やはり偶然性に満ちた〈破壊〉の世界とみられる。このように、第一創作集『御身』の各作品に現れてくる〈破壊〉の構図は、横光自身のもっている〈内在的不安〉を物語っている。

横光の初期の第二の段階の作品群（つまり新感覚派時期の作品群）は、内容的に明らかに

それまでの既成文学と違っているが、内容だけではなく、文学の表現の仕方の面においても、それまでの既成文学とは雲泥の差がある。新感覚派文学の性質の一つは、小説を如何に書くかについての模索する運動といえるが、横光の新感覚派時期の作品群の中では、〈物〉を〈人間〉のように見る、あるいは〈人間〉を〈物〉のように見るという語り手の転倒的な視線がよく現れてくる。新感覚派文学の本質を、社会組織や秩序が人間にもたらした疎外と崩壊などについて描く文学、あるいは社会的な場に置かれた人間の不安定性、非主体性を描く文学とみられるならば、「頭ならびに腹」は、特別急行列車の発車時刻に左右される、主体性を失った人間を語る物語とみることができる。また、「上海」は、各帝国主義列強の勢力の下に置かれる、アイデンティティ不明な境界人たちの不安定な生活を記録する物語とみられる。横光は、新感覚派時期に於いて、作品の世界の中で複雑な「場」に置かれている人間の持っている〈外在的不安〉を描くことによって、新しい時代の新しいリアリズムを模索し、立体的な人間像を創ろうとしている。これは横光のもっている、作家としての「全体小説」を書くことへの希求そのものといえよう。

初期の横光は「写実」と「象徴」の間に彷徨っていた。この「写実」と「象徴」の間の彷徨い、或いは闘いは、横光の文学生涯を貫く、一つ大きなテーマである。創作が進むにつれ、横光文学における「象徴」的な要素はどんどん強まり、その反面「写実」的要素はどんどん弱まっていく。これは反自然主義文学姿勢を取った横光の意識的に調整した結果と思われる。新感覚派と呼ばれた時期は、この「象徴」的要素の一番強まる時期と言えよう。昭和二年〈一九二七〉『文芸時代』に発表されたエッセイ「『笑はれた子』と新感覚――内面と外面について」で、「私は光りのない言葉は嫌ひである」と語ったように、この時期、横光は一筋言葉の「光り」に拘っていた。しかも、「今は私は外面的な光りの方を愛するときだ」と明言したように、横光の拘ったのは、言葉の「内面」の光りではなく、「外面的な」光りである。さらに、「光つた言葉をわれわれは象徴と呼ぶではないか。此の故に私は象徴を愛する。象徴とは内面を光らせる外面である。此の故に私はより多く光つた象徴を愛する。より多く光つた象徴を計画してゐるものを、私は新感覚派と呼んで来た」と語ったように、横光の拘っていた「内面を光らせる外面」、つまり外面の「光つた言葉」とは、「象徴」そのものであることがわかる。横光の新感覚的表現戦略は、この「より多く光つた象徴」を「計画」することである。横光の新感覚派風の作品は、「頭ならびに腹」が発表される一年前、つまり大正十二年〈一九二三〉の「蝿」と「日輪」に始まり、昭和三年〈一九二八〉から六年〈一

九三一〉にかけて連載された初の長篇「上海」（初出のとき「ある長篇」と呼ばれていた）に終るとよく思われている。しかし、本論文の第二部の中で詳しく考察したように、大正七年〈一九一八〉に執筆された散文詩「御身」（原題「太古礼讃」）は「日輪」と同じ世界のものと見られ、横光の新感覚派時代は大正十二年〈一九二三〉よりももっと遡ることもできる。このように、八、九年間以上もつづいていた新感覚派時代は、時間的に初期の横光文学とほぼ重なっている。それゆえ、大正十三年〈一九二四〉から昭和二年〈一九二六〉にかけて、文壇を席巻した新感覚派運動は、横光にとって、初期の文学的な模索の開花期ということができる。また、横光における新感覚派運動の性質を考えるとき、次の二点が指摘できる。一点は反自然主義運動である。横光は「感覚活動」（感覚活動と感覚的作物に対する非難への逆説）（『文芸時代』、大正十四年〈一九二五〉・二月）の中で、「未来派、立体派、表現派、ダダイズム、象徴派、構成派、如実派のある一部、これらは総て自分は新感覚派に属するものとして認めている。」と語っていた。ここで挙げられた各流派はヨーロッパの前衛芸術に属するものであり、所謂モダニズム運動の一環として考えられる。横光はこれらの前衛芸術流派の中から、作者の主観活動と結びつく、共通の要素「感覚」を見つけた。この「感覚」は、従来の自然主義文学が強調してきた、人間中心主義の「自然感覚」そのものではない。これは、「物自体」と作者の主観活動の総合作用によって、創られる新しい「感覚」である。もう一点は、小説を「如何に書くか」についての模索運動である。これも反自然主義運動の性質と緊密なつながりがある。横光は「如何に生きるか」という明治以来の日本の文学における古臭いテーマと、その日記的な書き方に不満をもっていた。「作家は自分の方法論をもって作品を書かなければならない」という考えをもっている横光は、同時代の作家よりも、いち早く小説を「如何に書くか」という近代作家の新しい土俵を建設しようとしていた。新感覚派運動は彼のその建設する姿を記録した運動といえよう。文章上の技巧だけを弄ぶ文学運動は、決してそれほど長く人々の記憶の中に残らないはずである。しかし、既成文学の狭小なところを真正面から破り、本当の芸術作品をまじめに作ろうとする、昭和の新世代の代表作家として、まじめに闘っていた横光と彼の文学は、これからも人々の記憶の中に残っていくに違いない。

【審 査 結 果 報 告】(中野新治)

副題に「闘いの軌跡」とあるように、本学位論文は執筆者鐘（以下筆者と呼ぶ）が、横光利一の初期文学を意味づけるにあたり、単なる作品分析ではなく、作家としてどのような方法意識を持っていたか、また、それは、横光のどのような現実の状況に由来するものか、を明らかにしようとしたものである。

横光は「文体の定着を意識的に拒否しつづけてきた稀有の作家」（井上謙）、「人間の行為を環境との関連において定位する」（中村三春）作家、と位置づけられているが、筆者によれば、それは、横光を襲う現実的苦悩とそれによる自己の暗い心情との闘いであり、同時に、自己の暗い心情を自然に吐露することをよしとする日本の私小説や自然主義文学の潮流との闘いであった。筆者によれば、精神を病むくらいまで苦しんだ横光であったからこそ、人間をその環境の中に投げ込み、徹底して相対化する（「蝿」や「頭ならびに腹」はその最も明瞭な作品である）創作方法が確立されねばならなかったのである。

また、「日輪」に代表される横光の叙事詩的世界の造型や、旧約聖書への強い関心も、「人間を超えたもの－運命、神」に支配される人間の現実を表現しようとする意欲によるものである。さらに、「上海」において描かれる列強の祖界地に生きるアイデンティティを喪失した「境界人」たちの、常に状況に左右され自己を貫くことが不可能な姿も、横光の痛切な人生経験と、人間の現実を直視する精神によってもたらされたものである。

以上のような筆者の視点は、いささか単純化されすぎるというきらいはあるものの、「新感覚派」の代表とされる横光が、いかにしてその位置を占めるにいたったかをよく説明しえている。初期作品についての文献が少ないにもかかわらず、よく目くばりがしてある点も評価に値する。ただ、「動く小説」といわれる「上海」を分析するに当り、ジェラール・ジュネットの『物語のディスクール－方法論の試み』を援用し、それによる構造分析を特に語りの手の視点から行っていることは評価できるが、評価軸がこれだけであることは物足りない。他の物語論も併用することが望まれる。また、横光の「純粋小説論」への言及もあるが、この論の本質についての分析がないことについては不満が残る。ヨーロッパからの新しい芸術運動、文学運動が横光に与えた影響についても、もっと踏み込んだ論及がなされるべきである。また、本論文の最後に、まとめとして「初期横光文学の特質」が置かれているが、前半部との重なりが多く、これがわざわざまとめられた意味が伝わりにくいと言わざるをえない。むしろ、論述の流れから言って、新感覚派確立以後の横光の変貌がなぜ起こったかについて序説的に気づきを述べた方が、＜文体の定着を拒否しつづけた横光＞を論じるにふさわしいのではないか。

とはいえ、中国人でありながら日本の文学を論じるという、「境界」に位置する筆者であるからこそ生まれた横光への共感が全体を支えており、明確な主張のある論文となっていることは高く評価できる。よって、博士学位論文と認めるものである。